

## 講演会及び研究集会の記録

## 第11回(平成23年度)弘前大学FDワークショップ

(21世紀教育センター)

21世紀教育センター主催による第11回FDワークショップが、青森ロイヤルホテルを会場に、6月11日、12日の一泊二日で開催されました。今回のテーマは「大学準備講座ワークショップ」であり、合宿形式、体験形式のワークショップでした。参加者は最近弘前大学に赴任された教員を中心に、他大学からも含めて18名、また4名の学生の参加、ミニレクチャーの講師、21世紀教育センターの教員・事務職員を合わせると、総勢38名となりました。

冒頭神田理事からの挨拶とミニレクチャー「教育者総覧」では、弘前大学は教育者総覧では全国的にも注目されていることが強調されました。教育に力を入れている大学として、浸透してきたと言うことでしょうか。また、自分たちの学生の頃と今とは状況がかなり異なるので、当時のような教育はもはや成り立たないとの指摘もありました。

今回は、参加者が4つのグループに分かれ、最終的な模擬講義に向けて、授業の目標設定、内容・評価の設定、模擬授業案と作業をつなげてゆく形式で進められました。

まず、グループのメンバーの気持ちがあち解けるように「アイスブレイキング」から始まり、各グループの名前を決めるところから始まりました。それぞれの特徴が現れる名称ということで「肴魚(ダブルさかな)」「ハイブリッド」「つがりあんず」「チームめがね」と4チームの名前が出そろいました。その意味は、読者の皆様の想像にお任せします。

○ミニレクチャー(1):小岩副センター長から「シラバスの書き方」についてのミニレクチャーがありました。Ⅰ授業は設計から、Ⅱ授業のシラバス、Ⅲ授業設計のポイント、Ⅳ設計力を高めるには、という順で講義が進みました。ご自身のシラバスも参考に、設計からシラバスに持って行くにはどうするか、という分かり易い説明でした。最終的には、専門家としての学問観や教育観が必要とのことで締めくくられました。

○グループ作業(1):この後、各グループで授業の副題・目標の設定に関する作業が行われました。それぞれのグループの授業名は「食の文化」「健康の科学」「津軽弁(津軽人になる)」「物理学(力学)」と決まり、作業が開始されました。

○ミニレクチャー(2):宮永FD委員から「学習成

果を評価する」というテーマでミニレクチャーがありました。今回のワークショップの基本となるテキストとして「大学教員準備講座」が使われていますが、それを批判的に読んでみることからレクチャーが始まりました。学生に対する学習の評価はいろいろな目的や方法があるが、教員・学生の双方にトラブルが起こる原因となりかねないので注意が必要とのことでした。お互いに納得のいく評価がなされてこそ、その目的を達成すると言うことでしょう。

○グループ作業(2):先の作業で決まった授業名について、ここではさらに授業内容および評価を設定する作業が進められました。授業を15回に分け、どの時間でどのようなことが行われるのか具体的に進められました。

○ミニレクチャー(3):田中副センター長から「授業観察のすすめ」というテーマでミニレクチャーがありました。自分なりの教育観をまず持って、それを他人と比較することによって進めるべきであることが指摘されました。一般に90分の授業時間を、15分の導入、60分の展開、15分のまとめに分けて授業を進めることが有効であることが示されました。

○ブレイクタイム:ここでハーバード大学マイケル・サンデル教授の「熱血授業」のビデオを鑑賞し、批判的にその授業に関する意見を述べ合いました。すでに、本ワークショップの参加者はグループ討論で授業を批判的に見る目が養われており、かの有名なサンデル教授の講義にも批判的意見がたくさん出ました。

○グループ作業(3):模擬授業案の作成を行いました。翌日の模擬授業に備えて、授業案の作成が行われました。

一日目はここで修了し、夕食懇親会でも議論を続けたグループもあったようです。

○グループ発表:翌日、いよいよ各グループが模擬授業を15分、その後質疑応答が20分の予定で進められました。神田理事はじめ、21世紀センターの面々も優秀な(?)受講学生に扮して、模擬授業が進められました。各模擬授業が終わるごとに、他のグループから授業のよかった点と修正が望まれる点が忌憚なく議論され、お互いに切磋琢磨することの重要性を実感しました。

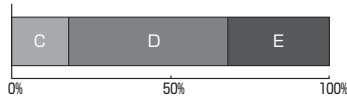
今後のワークショップの改善に向けて、今回も参加

者にアンケートをお願いしました。以下に、その結果をまとめてみます。

**設問1 今回のワークショップを全体的に評価してください。**

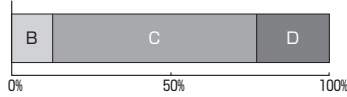
**(1) 内容の価値についてどう評価しますか。(回答数22)**

- A 価値なし (0%)
- B 価値少ない (0%)
- C いくらか価値あり (18%)
- D かなり価値あり (50%)
- E きわめて価値あり (32%)



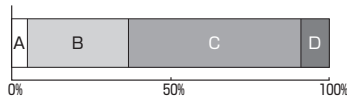
**(2) 内容に対する時間量はいかがでしたか。(回答数22)**

- A 多すぎ (0%)
- B やや多い (13%)
- C ほぼ適当 (64%)
- D やや少ない (23%)
- E 少なすぎ (0%)



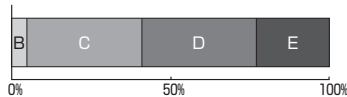
**(3) 内容の難易をどう感じましたか。(回答数22)**

- A きわめて難しい (5%)
- B やや難しい (32%)
- C ほぼ適当 (54%)
- D 少し易しい (9%)
- E 易しすぎ (0%)



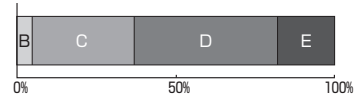
**(4) このようなワークショップ形式の効果についてどう思いましたか。(回答数22)**

- A 効果なし (0%)
- B 効果少ない (5%)
- C ある程度効果的 (36%)
- D かなり効果的 (36%)
- E きわめて効果的 (23%)



**(5) このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか。(回答数22)**

- A 全く不適切 (0%)
- B やや不適切 (5%)
- C ある程度適切 (32%)
- D かなり適切 (45%)
- E きわめて適切 (18%)



大半の参加者が内容には価値があると評価しています。「時間的にはやや多い」方に意見分布が見られます。一日半では時間が足りないのかもしれませんが。内容の難易度も「やや難しい」と判断した人の割合が高いようです。普段の授業にはないことが議論されているためでしょう。効果と興味に対する設問はおおむね良かったです。

**設問2 今回のワークショップ全体にわりと良かったと思われる点(自由記述)**

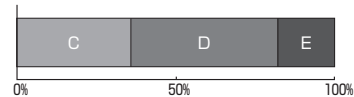
専門・分野の異なる人と交流できたことが最も多い記述でした。総合大学らしく、様々な分野の教員と議論できることが有用だと言うことでしょう。また同様な意味で学生の参加があったことも評価されています。

**設問3 今回のワークショップ全体にわりと改善すべきと思われる点(自由記述)**

今回は最後に参加者が模擬授業を行うという野心的なプログラムだったわけですが、そのための準備や資料収集の時間が少なかったことが反省点としてあげられています。模擬授業を行う内容などグループ内で話し合う時間も足りなかったようです。また、グループワークだと自分の意見がなかなか表に出にくいという指摘もあります。

**設問4 このワークショップで示されたような方法を今後取り入れようと思いますか。(回答数22)**

- A 全く取り入れる気はない (0%)
- B 余り取り入れようとは思わない (0%)
- C 少し取り入れてみたい (36%)
- D かなり取り入れてみたい (46%)
- E 大いに取り入れたい (18%)

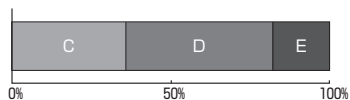


## 講演会及び研究集会の記録

アンケート結果を見ると、ここで学んだ方法を今後の授業に取り入れてみたいと考える参加者が多いようです。また、今後このようなワークショップを持つことに対しても積極的な結果になっています。

**設問5 今後ともこういうワークショップを持つことに対して（回答数22）**

- A 反対（0%）
- B 特に持たなくてもよい（0%）
- C 持っても良い（36%）
- D 持つ方が良い（46%）
- E 是非持つべきである（18%）



**設問6 このワークショップの成果に関連して、今後1年の間に実施したいと考えていることを箇条書きにしてください。**

いくつかの категорияに分けてみますと、研修の内容に関して学部他の教員達と報告会などを開き、情報を共有したいという意見が目立ちました。また、他の教員の授業を積極的に参考にしたいという意見もあります。模擬授業を通して明らかになったように、ゆったり、分かりやすく話す、聴講する学生の側にたった講義を行う、90分の時間を導入、本論、まとめに分けてメリハリを付けた授業を展開するという意見が多くありました。

全体を通して、内容が多く、時間が足りなかったという反省点も有りましたが、今後役に立つような満足の行くものであったとの評価であったと思われます。

弘前大学高大連携シンポジウム

テーマ 「新学習指導要領に伴うセンター入試のあり方」

(21世紀教育センター)

本学では、高校と大学の教育内容を知り、意見交換を行う事を目的として、平成14年度より、パネルディスカッション形式のシンポジウムを毎年実施している。平成23年度は8月8日（月）、総合教育棟2階大会議室で、「新学習指導要領に伴うセンター入試のあり方」と題してシンポジウムが開催された。

テーマは来年度から、いわゆる「ゆとり教育」の脱却を目指した新学習指導要領による高校数学と高校理科が先行実施される。特に理科の変更内容は大きく、学習内容や単位数、必修科目なども大幅に変更される。それに伴い、センター入試も理科に関しては大きく変わるようになっており、どのような科目をセンター入試に課すかは、大学がどのような素養を持つ学生を必要とするか、教養教育でどのような授業を行うかなどと大きく繋がっている。高校においても大学進学希望の生徒に不利益にならないようなカリキュラムの設定が必要である。今回は高校教育及び大学教育の立場から話題を提供していただき、それを基に意見交換を行った。

**【話題提供者の発表内容】**

青森県教育庁

高坂 智氏

平成24年度入学の高校生から理科は新学習指導要領の先行実施となる。大きな変更点は、理科基礎・理科総合の廃止と、単位数がⅠ・Ⅱがすべて3単位から基礎を付したものが2単位、基礎を付しないものを4単位となったことである。基礎を付したものは週に2回行う程度になり、新設の「科学と人間生活」は興味・関心を高める科目になる。必修科目としては「科学と人間生活」と基礎から1科目、または基礎を3科目となった。高校で一番懸念しているのが、今回の改訂で上位科目である基礎を付していない科目が必修からはずれたことである。これにより理系コースの学生でも基礎科目を一つしか履修してこない学生が出る可能性がある。また文系コースの学生においては、基礎的科目が3単位から2単位に減ることにより、大学が理科の素養を確認するため1科目だけでは足りないと考え、2科目以上を試験科目に課す可能性を危惧している。理科を教える立場としてはよいことであるが、そのしわ寄せが他の科目に行くことになるので調整が難しい。推薦入試に関しても、高校で履修している科目数の条件を増やすことも想定される。こういう条件に関しては、理系であれ文系であれ、早めに設定してもらわないと高校でのカリキュラムに組み込めないケー